

領家変成帯のメタチャートに記録された付加体形成期変形作用

Primary folding structures of accretionary process in high-grade metacherts in the Ryoke metamorphic belt, SW Japan

奥平 敬元 [1]; 別府 裕樹 [1]

Takamoto Okudaira[1]; Yuki Beppu[1]

[1] 阪市大・院理・地球

[1] Dept. Geosci., Osaka City Univ.

高度変成岩中の明瞭な面構造の発達は、強い延性変形作用によって形成されると考えられており、それらは広域的な応力場に呼応したものである可能性が高い。しかし、高度変成岩類中でさえ、付加体もしくは堆積盆での続成作用や変形作用時に形成された初生的な構造はよく保存されている場合がある。西南日本内帯、白亜紀低圧高温型の変成帯である領家変成帯には、ジュラ紀付加体の美濃-丹波帯由来と考えられる層状メタチャートが褶曲した露頭が多く存在する。これらメタチャートの褶曲軸は、一般に周辺の泥質片岩の褶曲軸と一致しない。この観察事実はメタチャートと泥質変成岩に保持されている変形組織の起源が異なることを示唆する。本研究では、泥質片岩中の礫とメタチャート中の放散虫化石を用いて歪解析を行なった。その結果、放散虫化石の変形はメタチャートの褶曲構造の形成と相関はなく、周囲の泥質片岩中の礫の変形と層面片理の発達に相関があるということが明らかになった。これはメタチャートの面構造が堆積時の層理面に相当し、その褶曲構造は美濃-丹波帯形成時の未固結時変形によって形成され可能性が高く、泥質変成岩の変形構造に調和的な放散虫の変形は、領家変成作用に関連した変形作用によって形成されたことを示唆する。